

別添 4

平成28年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究分担者 池松 和哉 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。特に、標準的な記載例と解説を加えた e-ラーニングのシステム構築を行う。

本年度は、実際の事例をベースとした模擬事例を設定し、模範記載例（標準的記載例）を選択する問題形式とその解説を作成した。医師の自学自習に活用できるよう、e-ラーニングのシステムにした。

A．研究目的

本研究は、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を収載した教育コンテンツを開発し、適切な原死因の記載と、その普及・啓発を目的とする。

B．研究方法

研究開発の内容は大きく、事例と標準的記載例、その解説を中心とするコンテンツの作成、作成したコンテンツを用いた教育効果の評価、からなる。研究初年度の本年度は事例と標準的記載例、その解説の作成を中心に行う。

専門領域（法医学）における比較的典型的な事例を収集し、死亡診断書・死体検案書を作成する上で、問題となる点や課題を抽出し、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた、各事例について模範記載例（適切な記載例）とその解説も作成した。

（倫理面への配慮）

事例集の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容を含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる外因死例を中心にした20例の模擬事例を設定し、それぞれについて適切な記載例を選択するe-ラーニングのシ

ステム構築を行った。

D．考察

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会経済的に広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。その死因統計の基礎となるのが死亡診断書・死体検案書の記載内容であり、死因欄に記載された傷病から死因選択ルールにより原死因を選び、死因が分類される。

そのため、医師は死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。

本研究では事例集を中心とした教育コンテンツを作成した。この評価については次年度に行う予定であるが、これを活用することで適切な記載に関する知識を普及させるとともに、適切な原死因選択を行うことの重要性も啓発していく。これらの活動を通じて、原死因選択方法についての周知と記入に関する意識の向上が、直接的・間接的に死因の精度向上につながり、ひいては死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

E．結論

死亡診断書・死体検案書作成にあたり、記載が困難な例や記載方法に迷う例を、実際の

事例に基づき課題から適切な模範記載例（標準的記載例）を選択する学習システムを作成した。これらの成果は、国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1．論文発表

該当なし。

2．学会発表

池松和哉．死亡診断書・死体検案書の作成に関する留意点，長崎県医師会・警察活動に協力する医師の部会第1回研修会，2016年11月5日，長崎市，長崎県医師会館

平成28年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究分担者 横田 順一郎 独立行政法人 堺市立病院機構 副理事長

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するため、事例についての標準的な記載例を作成し、教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。

本年度は、実際の事例を基礎とした模擬事例集を策定し、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）と、不適切な記載例およびその解説を作成した。それらの内容を、医師の自学自習に活用できるよう、e-ラーニングのシステムとして作成した。

次年度は、本年度に作成した事例集を用いて、その教育効果の検証を行う。

A．研究目的

本研究は、死亡診断書・死体検案書の適切な記載についての普及・啓発、特に適切な原死因の選択のための教育コンテンツを開発することを目的とする。

B．研究方法

研究開発は大きく、事例と標準的記載例を中心とするコンテンツの作成、作成したコンテンツを用いた教育効果についての実証試験からなる。教育効果については、現場の医師を対象として評価を行う。研究初年度の本年度は 標準的記載例の作成を主に行った。

特に、専門とする救急医学領域における過去の臨床経験や、学会や検討会での討議事項、カンファレンスなどでの情報も含め、死亡診断書・死体検案書の記載の際に悩むことが多いと考えられる典型的な事例を収集し、書類作成上の問題点や、死亡診断書・死体検案書の記載が困難な点を抽出した。それらの課題を基に、学習用の事例を作成し、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成し、あわせて不適切な記載例や記載上の注意点も作成した。

（倫理面への配慮）

事例集の作成において、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例や記載方法の判断に迷

うと考えられる事例について、合計20例の事例を設定した。特に、救急事例を中心に作成した。それぞれについて不適切な記載例と模範記載例（標準的記載例）からなる選択肢を作成し、その解説も加え、e-ラーニングのシステムを構築した。

D．考察

死亡診断書、死体検案書の記載内容は、死亡の医学的・法的な証明のみならず、特に原死因に関する事項は、わが国の死因統計を作成する際の基礎資料となる。そのため、死因欄に記載された傷病から死因選択ルールにより原死因を選び、死因を分類することは基本的な事項であるが、重要である。

死因統計は、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつであり、わが国の保健衛生行政や社会経済的にも広く活用されている。そのため、医師は、個々の死亡診断書・死体検案書の記載内容がどのような形で統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。そのため、必ずしも適切でない記載や、死因の選択がみられるといわれており、これら記載の適切化は、死因統計の精度向上と、それを介した国民の健康増進や福祉の向上につながる。

今年度の本研究ではまず事例集を中心とした教育コンテンツを作成した。この評価については次年度に行う予定であるが、これを活用することで適切な記載に関する知識を普及

させるとともに、適切な原死因選択を行うことの重要性も啓発していく。これらの活動を通じて、原死因選択方法についての周知と記入に関する意識の向上が、直接的・間接的に死因の精度向上につながるものと考える。

E．結論

実際の事例に基づく課題を設定し、死亡診断書・死体検案書作成の際の、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる例についての不適切な記載例と模範記載例（標準的記載例）及びその解説を作成した。本研究の評価は、次年度に実証試験を行うが、作成した教育コンテンツの活用を介して、国民の健康増進・福祉の向上に寄与することが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1. 論文発表

横田順一郎：特殊な受傷機転．JPTECガイドブック．へるす出版、東京；178-183，2016

横田順一郎（編集委員長）：外傷初期診療ガイドラインJATEC改訂第5版、へるす出版、東京、2016

2. 学会発表

該当なし。

平成28年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究分担者 加藤 稲子 三重大学大学院周産期発達予防学講座 教授

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載することを普及・啓発するための、教育コンテンツの開発を目的とする。

本年度は、模擬事例の作成と、その事例での原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）、不適切な記載例の自習に活用できるよう、解説を含めたe-ラーニングのシステム構築を行った。

次年度は、本年度に作成したe-ラーニングの教育効果の検証を行い、さらにコンテンツの拡充をはかる。

A．研究目的

本研究は、死亡診断書・死体検案書の死因について、模擬事例での標準的な記載例を作成し、適切な原死因選択に関する事項の普及・啓発のための教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発は、模擬事例とその標準的記載例及び解説を中心とするコンテンツの作成、作成したコンテンツを用いた教育効果の評価からなる。研究初年度は模擬事例とその標準的記載例及び解説中心とするコンテンツの作成を中心に行う。

死亡診断書・死体検案書を作成する際に、記載が困難な点や、記載内容に関して問題となる点などの課題について抽出し、模擬事例として作成する。模擬事例の作成にあたっては、これまでの診療経験、学会、カンファレンス等で伝聞した情報も含め、小児領域における典型的な事例を収集し、学習用の事例を作成した。その事例について、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）、迷いやすい不適切な記載例およびその解説についても併せて作成した。また記載例については、研究班員全員で様式の統一を図った。

（倫理面への配慮）

事例集の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、特に記載方法の判断に迷うと考えられる小児医療領域での事例について事例を設定し、各班員の専門領域（外因死、小児医療、高齢者医療、救急医療等）について、合わせて20例の模擬事例を作成した。それぞれについて模範記載例（標準的記載例）、不適切な記載例とその解説を作成し、e-ラーニングのシステムの構築を行った。

D．考察

死亡診断書、死体検案書の記載内容は、単にそのヒトの死亡を医学的・法的に証明することのみならず、わが国の死因統計を作成する際の基礎資料となっている。特にその記載内容のうち、死因欄に記載された傷病から死因選択ルールにより原死因を選び、死因の分類を考慮して診断書等を作成することが重要である。しかしながら、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかについては、現状の意識・認識は必ずしも十分ではない。

死因統計は、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。社会的に保健衛生行政や社会経済的に広く活用されており、その重要性は大きい。そこで、死亡診断書・死体検案書の記載内容がどのような形で統計作成に利用されているかを認識し、適

切な原死因記載の重要性についての学習コンテンツが求められている。

本研究ではまず、模擬事例集を中心とした教育コンテンツを作成した。この評価については次年度に行う予定であるが、模範記載例や概説も加えており、活用することで適切な記載に関する知識や、適切な原死因選択を行うことの重要性も認識できると考える。原死因選択方法についての意識の向上が、直接的・間接的に死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際に、記載が困難な例、判断に迷う例を中心に、模擬事例に基づく課題を設定し、自学自習のコンテンツを作成した。これらの成果は、国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1. 論文発表

該当なし。

2. 学会発表

該当なし。

平成28年度厚生労働科学研究費補助金（統計情報総合 研究事業）
（分担）研究報告書

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究分担者 鷲見 幸彦 国立長寿医療センター 副院長

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発を目的とする。

本年度は、模擬事例を作成し、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）および不適切な記載例とその解説を併せて作成した。それらを収載したe-ラーニングシステムを試作し、自学自習に活用できるよう構築した。

次年度は、その教育コンテンツの効果についての検証を行うとともに、コンテンツの充実をはかる。

A．研究目的

本研究は、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するための標準的な記載例を作成し、原死因選択のための適切な記載の普及・啓発のための教育コンテンツの開発が目的である。

B．研究方法

今回のコンテンツ開発の研究内容は大きく、模擬事例、標準的記載例、不適切記載例およびその解説からなるコンテンツの作成、作成したコンテンツの教育効果についての評価、からなる。研究初年度は 模擬事例、標準的記載例、不適切記載例およびその解説からなるコンテンツの作成を中心に行った。

死亡診断書・死体検案書の記載が困難な例を中心に、過去の診療経験、学会や検討会、カンファレンスなどで伝聞した情報も含め、比較的典型的な事例を収集した。記載を行う上での問題点や課題を基に、学習用の模擬事例を作成し、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成するとともに、不適切な記載例およびその解説も作成した。記載例については、研究班員全員でブラッシュアップを行った。

（倫理面への配慮）

事例集の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まないよう配慮した。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書記載の際に、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる事例にはしばしば遭遇する。専門の神経内科領域の事例を中心に、各領域合わせて20例の事例を設定し、個々の事例について不適切な記載例と模範記載例（標準的記載例）、さらにそれらの解説を作成した。さらに、それらの事例と記載例などをベースにe-ラーニングのシステム構築を行った。

D．考察

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会経済的に広く活用されており、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつである。死因統計の基礎となるのが1例1例の死亡診断書・死体検案書の記載内容であり、死因欄に記載された傷病から死因選択ルールにより原死因を選び、死因が分類される。そのため、死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、その記載内容は単に死亡を医学的・法律的に証明することのみならず、どのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。

本研究ではまず事例集を中心とした教育コンテンツを作成し、医師の自学自習に供しやすいような様式にした。この学習における評

価については次年度に行う予定である。

教育コンテンツの活用により、適切な記載に関する知識を普及、適切な原死因選択を行うことの重要性も理解し、原死因選択方法についての周知と記入に関する意識の向上が期待でき、死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与するものと思われる。

E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際の、記載に迷う例などを中心に。実際の事例に基づく課題を設定し、自習できるコンテンツの作成を行った。この成果は、死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与するものと思われる。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1. 論文発表

該当なし。

2. 学会発表

該当なし。

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究分担者 横井 英人 香川大学医学部附属病院 教授

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するための、標準的な記載例集を収載した教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。

本年度は、模擬事例を設定し、原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）とあわせて不適切な記載例およびその解説を作成し、医師の自学自習に活用できるように、e-ラーニングのシステム構築を行った。

A．研究目的

本研究は、医師が作成する死亡診断書・死体検案書の「原死因」の選択について、適切な記載を行うための教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発の内容は大きく、事例と標準的記載例（適切な記載）の選択を中心とするコンテンツの作成と、作成したコンテンツを用いた教育効果について、特に現場の医師を対象として評価を行う。研究初年度の本年度は標準的記載例を作成し、とりまとめた。

各分担研究者の専門領域における比較的典型的な事例を収集し、問題となる点や課題、あるいは死亡診断書・死体検案書の記載が困難な点や課題を基に、学習用の事例を作成し、ICD-10の原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）を作成した。それらの課題をとりまとめ、e-ラーニングシステムの構築を行った。

（倫理面への配慮）

事例集の作成に際しては、研究代表者、研究分担者の過去の経験も参考にすが、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、因果関係の記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる各領域（外因死、小児医療、高齢者医療、救急医療等）での事例

について、それぞれについて適切な記載例を選択し、解説の記載のある自己学習可能なe-ラーニングのシステムを構築した。

D．考察

死亡診断書、死体検案書は、単に人間の死亡を医学的・法的に証明することのみが目的ではない。それらの記載内容は、わが国の死因統計の基礎となっており、死因欄に記載された傷病から死因選択ルールにより原死因を選び、死因が分類される。

死因統計は、わが国の保健衛生行政や社会経済的に広く活用されている基盤データのひとつである。そのため、医師は死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、その記載内容がどのような形で記載内容が統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状の重要性についての意識・認識は必ずしも十分ではない。

本研究ではまず事例集を中心とした教育コンテンツを作成した。この評価については次年度に行っていくが、これを活用することで適切な記載に関する知識を普及させるとともに、適切な原死因選択を行うことの重要性を啓発する必要がある。これらの活動を通じた、原死因選択方法についての周知と記入に関する意識の向上が、直接的・間接的に死因の精度向上につながるものと考ええる。死因統計の精度が向上することで、国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与することが期待され、e-ラーニングシステム構築はそのひとつのステップになると考える。

E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際に、記載が困難な例を中心に、実際の事例に基づく課題を設定し、適切な記載例を選択するe-ラーニングシステムの構築を行った。これら本研究の成果は、死因統計の精度向上を介して、国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1．論文発表

該当なし。

2．学会発表

谷川原 綾子，辻 真太郎，福田 晋久，西本 尚樹，小笠原 克彦，横井 英人．医療機器不具合用語集のハンドリングツール構築に向けた同義語候補の同定に関する検討．第20回日本医療情報学会春季学術大会，2016年6月4日，島根県松江市

谷川原 綾子，西本 尚樹，辻 真太郎，福田 晋久，谷川 琢海，上杉 正人，小笠原 克彦，横井 英人．医療機器不具合用語集における同義語抽出に向けた異義語除外法の検討．第36回医療情報学連合大会，2016年11月23日，神奈川県横浜市

小野 大樹，横井 英人，中園 美香．医療機器等における不具合等報告の「健康被害・不具合状況」から「回収（改修）」につながる事象推定の試み．第36回医療情報学連合大会，2016年11月24日，神奈川県横浜市

適切な原死因記載のための教育コンテンツの開発（28020201）

研究分担者 宮武 伸行 香川大学医学部 准教授

研究要旨

本研究では、死亡診断書・死体検案書の原死因を適切に記載するための教育コンテンツの開発と普及・啓発を目的とする。

本年度は、模擬事例とその標準的な記載例を作成し、e-ラーニング様式で原死因選択ルールに基づいた模範記載例（標準的記載例）とあわせてその解説を作成した。医師の自学自習に活用できるよう、e-ラーニングのコンテンツを構築した。

次年度は、本年度に作成したコンテンツの拡充と、その教育効果の検証を行う。

A．研究目的

本研究は、死亡診断書・死体検案書の標準的な記載例を作成し、原死因の適切な記載の普及・啓発のための教育コンテンツの開発を目的とする。

B．研究方法

研究開発は大きく、事例と標準的記載例、解説からなるコンテンツの作成と、作成したコンテンツを用いた教育効果についての評価からなる。研究初年度の本年度は標準的記載例の作成を中心に行う。

過去の経験、学会や検討会、カンファレンスなどで伝聞した情報も含め、専門領域における比較的典型的な事例を収集し、問題となる点や課題、記載が困難な点を抽出する。それらの問題点や課題を基に、学習用の事例を作成し、模範記載例（標準的記載例）を作成する。あわせてその記載内容についての注意点や解説も作成、内容の統一をはかる。

（倫理面への配慮）

事例集の作成に際しては、個人情報や個人が特定できるような内容は含まない。

C．研究結果

死亡診断書・死体検案書作成の際に、記載が困難な例、あるいは記載方法の判断に迷うと考えられる各領域での事例について、計20例の事例を設定（うち、宮武担当分は5例）し、それぞれについて適切な記載例を選択する問

題形式と、さらにそれらの解説からなる事例集を作成した。

D．考察

死亡診断書、死体検案書はわが国の死因統計を作成する際の資料となる。記載内容のうち、特に死因統計の基礎となるのが、死因欄に記載された傷病から選択した原死因であり、それに基づき死因が分類される。

死因統計は、保健衛生政策を実施していく上での基盤データのひとつであり、わが国の保健衛生行政や社会経済的に広く活用されている。

医師は死亡診断書・死体検案書の作成にあたり、それぞれの記載内容がどのような形で統計作成に利用されているかを熟知しておく必要があるが、現状での医師の重要性についての意識・認識は十分ではないように思われる。

本研究で作成した事例集を中心とした教育コンテンツを活用することで、適切な記載に関する知識を再度正確に理解するとともに、適切な原死因選択を行うことの重要性も啓発できる。自学自習可能な学習コンテンツの利用により、直接的・間接的に死因の精度向上につながるものと考えられる。死因統計の精度が向上することが、ひいては国民の健康増進や福祉の向上に大きく寄与していく。

E．結論

死亡診断書・死体検案書作成の際に、記載内容に迷う例や注意すべき事項について、が実際の事例に基づく課題を設定し、それぞれの事例に基づき課題を設定し、それぞれについて適切な記載例を選択する形式の問題を設定した。これらの成果は、死因統計の精度向上を介して、今後の国民の健康増進・福祉の向上に大きく寄与することが期待される。

F．健康危険情報

該当なし。

G．研究発表

1．論文発表

該当なし。

2．学会発表

宮武伸行、木下博之．窒息死の季節性、気温との関連．平成28年度香川県医学会，2016年11月3日，高松市．香川国際会議場

